平成 25 年度看護部行動理念　　出し合おう！　新たな時代に　新たな手法！

見つめる目
しなやかな心
医療を支える　看護の手

看護部だより　2013 年 12 月号 第 272 号

特定医療法人衆済会
増子記念病院
看護部
部長　上村　志磨子
（認定看護管理者）

主任を拝命して　　～ 患者中心の看護とは？ ～

あなたは、どんな看護を目指していますか？

3階病棟主任　山内 博恵

私は増子記念病院に入社して、10 年程になります。30 歳代で入社し長女も生まれ、その子も小学校 3 年生になりました。やっと「母親の仕事は看護師なんだ」と理解出来るようになり「いってらっしゃい。頑張ってきてね」と、言えるようになりました。40 歳代となり、「これから 60 歳まで、どのような看護を提供していこうか」と考えていたころ、主任の話をいただきました。全く考えていなかったことで、とても悩みましたが、新しい立場と役割のなかで頑張ってみようと思い決心しました。一生懸命務めさせて頂きますので、これからもよろしくお願いします。

1　はじめに

国家試験の勉強も、そろそろ追い込みの時期となってきましたでしょうか。この頃になると学校で、職場で「あなたの看護観は？」とよく聞かれたことを思い出します。今回、私も主任の話をいただき、改めて「看護」について考える機会となりました。

2　初心に帰って

皆さんも、V.ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を読まれたことと思います。その中でなにか心に残っている言葉はありますか。私は、「人間の欲求は数限りない生活様式によって満たされるため、どのような賢明な看護師であろうと、また主観的には一生懸命であろうと、他人の欲求を完全に理解することは困難である。その人が理解している幸福の観念に合致して、その欲求を他人である看護師が満たすということは出来ない」と述べています。

「患者さんを理解し、ニードを把握する」という言葉を私たち看護師はよく用います。看護師の価値観に相手を合わせて自己満足したり、逆にいらだったり。「その人の幸福の価値基準は、その人の生きてきた過程や生活環境の中で形成されるものであり、看護師は謙虚にその人の気持ちに近づく努力をしながら、手助けできることはなにかをみる必要がある。」と川島みどり氏は述べています。

私たちがどうしたいかではなくて、患者さんやその家族の方がどうしたいのかが重要であり、そのための援助をしていかないといけないのです。

3　課題

高齢者の入院が増え、看護度の高い患者さんが増えており、私たち看護師の忙しさも増しているように思います。

平成25年度看護部行動理念　　出し合おう！　新たな時代に　新たな手法！

在院日数の短縮や在宅・老老介護も課題となっており、病院の在り方、病院看護のあり方について、私たちも考えていかなければなりません。来年には、新館オープンです。現在、看護部では少しでも多くの時間を患者さんとの時間と出来るように、業務の見直しをしています。そのなかで、少しでも患者さんと家族の方々の、これからの生活を考えられるケアをしていきたいと思います。

4　おわりに

主任となって、半年が過ぎました。あっという間で、なにが出来たのかと反省でいっぱいですが、主任として看護の役割モデルとなれるよう頑張りますので、よろしくお願いします。

以上

学生コーナー

『責任感の芽生え』

2階病棟　看護学生　鎌田未央子

名古屋に来てもう1年半が過ぎ、このままいけばあと少しで3年生になります。この1年半は私にとって充実しており、とても早かったと感じています。

1年生の頃は仕事を覚えるのに必死で学ぶことだけでしたが、2年生になり初めて後輩が入社してきて、学ぶのはもちろんですが『私は先輩である』という責任感も芽生え始めました。

私は、決して仕事を教えるのは上手くはありませんが、ただ教えるだけではなく相手に伝わらなければ教えても意味がないので出来るだけ分かりやすく、また、一度教えた後には理解してもらえたかをもう一度聞いて確認するようにしています。そして、理解しやすいようにするために、教えることに対して何故こうするのかといった根拠も併せて教えています。

3年生になればまた新しい後輩が入社してきます。また4年生の先輩は国試対策のため学業に励み休職期間に入ってしまうため、実質学生として仕事場では一番上の立場となるので今以上に責任感を持ち頑張っていきたいと思います。

話は変わりますが、2年生になり実習が始まりました。実習では受け持ち患者さんの情報収集をして、充足・未充足の判断、未充足に対する分析・解釈をします。それを踏まえ、その患者さんの問題点を挙げ、看護計画を立案し、実際に援助をし、経過記録を書いています。まだ基礎看護学実習の段階で分からないことが大半ですが、各論実習に向けて基礎がとても大切だと思っているので、出来なかったことは次回からは出来るように努力しています。

そして、今回の実習が終われば、約1年間実習がないので次の実習が始まるまでの時間を無駄にせず、勉強をしっかり行い今回の実習よりも成長できるようにしていきたいと思います。

私は『どんな時でも笑顔を忘れず患者様の支えとなり、どんな時でも適切に判断でき誰からでも必要とされる』そんな看護師になりたいと思っています。そのためには知識や技術を身につけなければいけないと思うので日々努力を忘れず自分が理想としている看護師となれるようこれからも精一杯仕事と学業に励んでいきたいと思います。

以上

「実習を通して」

患者さんの人生に関われることは幸せ

外来学生　山口　優美

名古屋に来て、増子記念病院で勤務をさせて頂いて早くも 1 年半を過ぎました。去年の 3 月は入社し何も分からず、仕事を理解するのに精一杯でした。

それから学校に通い始め、段々と仕事内容の幅が広がり、患者さんと接していく機会が増えていくなかでコミュニケーションをとることの難しさ・楽しさを感じました。現在は 1 年生が入社し、教えるという、去年とは違う立場にもなりました。

10 月に成人看護学実習 I がありました。前回までは看護過程を展開することが第一目標となっていましたが、今回の実習ではセルフケア支援が必要な患者さんの援助をすることが目標となっていました。

受け持ちをさせていただいた患者さんは食欲不振・倦怠感があり、なかなか離床が進まないといった状況にありました。主な援助はベッド上での全身清拭や寝衣交換、リネン交換などでした。また、入浴を入院してからできていないとのことであったため、手浴や足浴の計画も立てていきました。

ある時、手浴をベッド上でギャッヂアップをして行わせていただいた際、「えらい、もう終わろう。」との発言がありました。そのことを担当看護師さんに報告したところ、その患者さんは「いつも倦怠感の訴えがある。SPO_2 の低下などがなかったら離床のためにもどんどん援助を行ってもらっていい」との助言をいただきました。また、経鼻経腸栄養で食事を摂られており、補食のゼリーは拒否されており食事に対しての意欲も低下していました。

まず、清潔・食事に対しての意欲を上げていただくためにはどう接することが大切なのか、原因は何か、それはなぜ起こるのかを知ることが必要でした。

入院当初は自立歩行でした。しかし、食欲不振により食事が摂れず栄養摂取不足により倦怠感が出現する。行動をしようと思っても倦怠感のためできないのではないか、また患者さんは依存心が強い、という性格も意欲低下の原因ではないかと考えました。そこで私は看護計画を立て直しました。

私が、患者さんにこれをしたら離床に繋がるのではないか、ADL の低下を少しでも防ぐことが出来るのではないかと計画を立案し、患者さんに提案したところで、患者さんの意欲がその計画に合っていなかったら意味がありません。「共同目標」という言葉は大切だと感じました。また、患者さんが計画を受け入れていただけるかは働きかけるタイミングも重要だと考えます。

今回の実習で、できたこと、できなかったことどちらもあります。その反省を次回に活かしたいと思います。次回の実習は 1 年後と先ですが、職場には毎日患者さんが見えます。

以前、指導教員に「その患者さんの人生に関われることは素敵なことじゃない？」と言われたことがあります。今回の実習で学んだ接し方、また、私の日々行っている業務が患者さんの人生に作用しているということに責任を感じるとともに、関わらせていただけることに感謝しながら、ひとつひとつの関わり方を大切に行動していきたいです。

以上

平成 25 年度看護部行動理念　　出し合おう！　新たな時代に　新たな手法！

部署報告

手術室

手術室にＣＥがやっと来た

１　はじめに

オペ室業務は大まかに言えば、外回りと器械出しである。

前回の病院機能評価のおり、オペ室にＣＥがいないということで、次回に向けての希望でオペ室へのＣＥ配置を出していた。あれから３年、ようやくオペ室にＣＥが関与するようになった。オペ室に新しい器械が入る度、エラーが出たらどうしよう、何かあったらすぐ対応できるかなとひやひやであった。

２　オペ室で管理している器械

電気メス、超音波凝固切開装置（ソノサージ・エンシール・リガシュア）、麻酔器、キューサー（肝切離装置）、マイクロターゼ、結石破砕装置（ホルミウムヤグレーザー、リソクラスト）、超音波水晶体乳化吸引装置（白内障手術）、バーサカット（前立腺肥大手術）、ベッドサイドモニターなど。

３　ある日の出来事（動かない！）

それは、ある日の泌尿器のオペ中だった。ｆ－ＴＵＬ（尿管結石砕石）の最中、結石破砕装置レーザーのフットスイッチが作動しなくなった。考えられる事はコードの断線。20 年以上使用している電気メスでさえ、一度もフットスイッチが作動しないことはなかった。医師は一言、「技士さん呼んで！」まだ結石を破砕する前だったため、医師もかなり焦っている。「（レーザーの）業者に連絡して！」「リソクラスト（空気圧で結石を破砕する装置）を準備して！」と矢継ぎ早に言ってくる。

しかし、そういう時に限って外回り看護師が一人しかいなかった。まず、第一にＣＥに連絡。第二にリソクラストを準備した。その間にＣＥ５名ほどが到着し、医師が状況を説明。そして、看護師は業者に連絡を入れた。今まで扱ったことのない器械を目の前に、ＣＥ達は取扱説明書を見ながら点検を始めた。そして、メーカーのコールセンターに連絡を入れ、電話でのやり取りをしながらいろいろな箇所を点検した結果、取り扱いには問題はなく、おそらくフットスイッチの断線が原因であろうと推測された。肝心の手術はというと、リソクラストで事なきを得た。そして業者は、手術が終了後に到着した。

４　ＣＥの出番

手術室看護師本来の業務は看護である。患者が安全にそして安心して手術が受けられるように援助し、手術中の患者のちょっとした変化に気づいてすぐに対処できるように観察をしなければならない。

しかし、器械トラブルが発生すると対処に追われてしまい患者そっちのけの状態で、声かけもできず、安心・安全な手術とはかけ離れてしまう。実際、この手術のときに入室時から多弁だった患者さんが術中に、周囲のただならぬ雰囲気を感じたのか途中から静かになってしまった。

このとき、思いがけない呼び出しで、いきなり今まで見たことも触ったこともない器械の点検を依頼されたＣＥたちは、「お役にたてなかった‥‥」という無念さが残り、手術室看護師は、こういう時にＣＥがいてくれると看護業務に専念できると強く感じた。

５　現在、手術室でのＣＥの業務は

この出来事をきっかけに、ＣＥ側から「オペに使用する器械に携わっていきたい」という申し入れがあった。現在は、全麻のオペ予定が入っているときに、麻酔器の点検にＣＥが来る事になった。また、スムーズに全麻の予定がわかるようにパソコンで手術予定の確認ができるようになったのが、ひとまず第一歩である。

手術室スタッフが放射線科に出向しているシャントＰＴＡに 11 月からＣＥがつくこととなり、現在順番に研修している。少しずつではあるが、ＣＥの他部署への出向業務が増えてきている。

６　まとめ

器械トラブルをきっかけとして、他職種との連携がいかに大切であるかを痛感した。オペ室管理の器械は、看護師が使用前に点検を行っている。しかし、定期的な点検は行っておらず、故障などのトラブルが発生した時に業者に連絡を取るというパターンが多い。

将来的にオペ室で使用しているすべての器械の使用前点検、定期点検、トラブル発生時の対処をＣＥが行ってくれることを期待している。

以上

臨地実習指導者講習を受講して

第 3 透析室　　　西山　貞香

１　はじめに

私は今回、実習生の最近の傾向や、臨地実習の目的を知り指導者になにが求められているか、いまどきの若者の精神状態や動向をしることができ対応方法を取得する、他の研修生と交流し他病院の教育方法などを学びたいと思い、9 月 6 日から 11 月 12 日までの期間臨地実習指導者研修に参加した。

２　看護の基本を忘れない

2 か月間、臨地指導者講習を受講して、自身が今まで経験だけの浅い知識で教育に携わっていたことを実感した。

看護概論を復習することで、自分自身がなんとなくとっていた行動が一つ一つ意味があり理論づけられものだと感じた。初心に返りナイチンゲールの看護を学びなおすことで、改めて奥が深いものであると感じた。今後、看護師を続けていく上において基本を忘れずこれからもこの学びを振り返り、自分なりの看護覚え書を読んでいきたい。

３　「ケアの本質」

看護論ではないが、メイヤロフの「ケアの本質」という本の一部について抄読会を行った。初めての講読であったが一人で読んでも文章が難解であり、理解までいたらなかったが、グループワークを通じて仲間と共に読み込むことで、解釈をつけ発表することができた。難しい内容であったが、その中でも相互作用が一番大切だと解釈した。看護師、患者間や学生、指導者間、スタッフ間でも通じるものだと感じた。

研修中、一番印象に残った講義は教育方法の講義だった。研修とは、「研究」と「修養」の 2 つの意味があり、学問として学ぶことが人間性を磨くことと教わった。「教育とは」について根本的なことから学んだ。

４　シンキングマップ

初めて、シンキングマップという方法を使い、自分の考え、他人の意見を書き出すと考えが視覚的にわかるようにすること、また、その言葉を繋げることで新たな視点となり、考えをまとめる際に、とても有効な方法であることを学んだ。個人的にも例えば看護研究などに対し、言葉の展開図として考えを整理

し、発展させるために今後も活用していきたいと考える。さらに、教育実践的なあり方を通して教育を支える思想と技術、グループワークで教育に関する多様な考え方を深めることができた。

看護学生に接する際には、何故そう考えるかを理論的に考え、意見を述べることができる環境を提供し、発想力を豊かにし学生にとって有意義な実習になるよう導きたい。

5　実習指導案

実習指導案をグループワークで作りあげた。バックグラウンドが異なる 6 人であったが、活発な意見交流を繰り返すことで無事完成することができた。大きい目標や言葉のみだと全員の共通認識がぶれてしまい、こと細かく掘り下げることでぶれない共通認識を図ることは容易ではなかったが、意見交換に時間を費やすことでできた。

共通認識が今回の指導案の軸となった。色々な言葉が出るが抽象的であり意味が大きく、具体的にすることに苦労したが、普段も雰囲気で言葉の意味を察することが多いが、本当に大事なことは共通認識できたか、言葉にだして確認をしなくては誤解を生じる可能性があるため、今後、気を付けて意識的に行動するようにしたい。

6　褒めるより「認める」

学生に意図的に関わり、早い段階でフィードバックをしで気づきがあったりする時は褒めるのではなく認める。一般に褒めるとは「優れているところを褒める」と思われがちだが、「発想を認める」というように褒めるより認めることの方が成長を促すことがわかった。指導案の場面設定時に際し、指導者の行動や言動に一つずつ意味付けしていくことで普段なんとなく行っていた行為が、考察によって意味があり、根拠のある行動になるという意味を再認識できた。臨地実習において学生により学びが多い実習にするためには指導者が意図的に学びや体験の機会を広げることで実習での自己の成長を感じ、看護に魅力を感じ、これからの長い看護師としての看護観の根幹になるのではないかという結論に達した。

7　「教える」から「育てる」へ

人を育てていくには、育てたい人の主体性を大事にすることと①観察する②誉める・認める③教える（根拠がある）④工夫する（スモールステップ）⑤待つ（選択を促し、より主体的にするため）ことが必要である。このような行動をとることで、看護を行うことの喜びや生きがいを見出し、長く看護師を続けてもらえるような行動を実践していきたい。そして、「教える」から「育てる」にシフトチェンジし学生の潜在している能力を引き出すための介入を積極的に行っていきたいと考える。

8　おわりに

2 か月間を通しすべての授業が自身にとってインパクトが大きく、初心に返って学ぶことができた。自己の見解ではなかなか気づかなかったが自分自身を見直す素晴らしい機会であった。学生の自主性を望むだけではなく自身も自主性のある行動をし、いずれ看護師になる将来を見据えて学生に真摯に向かいあっていきたい。

今回の学びを生かし、これを臨地実習の学生だけではなく、現場でも生かしていく。そうした大きな学びの機会となった。

以上